

元気おおとよ新聞

ご意見ご感想はホームページから：<http://www.genki-otoyo.org>

発行元：特定非営利活動法人 元気おおとよ

おおとよガレット号
活動開始！

昨年、「お山のでづくり市」（本山町にて）や大田口消防所の横で夏季限定営業していました「おおとよガレット」が、今年から「NPO法人元気おおとよ」の事業として、移動販売車にて活動することになりました。

ガレットとは、そば粉100%の塩味の生地を鉄板で薄く焼いた、フランス・ブルターニュ地方の伝統料理です。この生地は卵、チーズ、ハム、野菜など、色々な具材を載せて焼き上げます。ブルターニュ地方では、ほとんどの家庭に専用の鉄板があり、家族が集まると皆で焼いて食べます。（大阪で、一家に一台タコヤキ器があるのと同じ感覚でしょうか？）そもそもヨーロッパには無かったそば粉がブルターニュに入ってきたのが17世紀。（中国からシルクロードを通じて伝わった）日照時間が少なく冷涼なブルターニュ地方では、小麦粉がうまく育たず、輸送の便が悪かった当時の小麦は高価でした。そのため、土地の気候に合ったソバが、盛んに植えられ、人々



イメージ図

の貴重な栄養源になっていたのです。ソバは、日本では麺の形で、ブルターニュでは薄く焼く形で、定着しました。が、そば粉ではなく小麦粉を薄く延ばして焼いたものが「クレープ」としてフランス全土や日本に広まったのです。

私がガレットと出会ったきっかけは、偶然入ったレストランでした。ソバといえば和のイメージしかありませんでしたが、卵やチーズ・バターなどの洋風食材とも違和感なくマッチし、素朴な風味はもちろんのことヘルシーで栄養バランスがよく、おかず系からデザート系まで幅広く組み合わせられることにとても感動しました。大豊町でも古くからソバが栽培されてきたという事実は、どこかブルターニュと共通点があるように感じ、大豊町でもガレットが受け入れられるかもしれないと思いました。

「おおとよガレット」号は、町内の地域イベントを盛り上げるために要望があればどこへでも出店いたします。また町外のイベントにも積極的に出店します。具材として使用する野菜やそば粉は、できる限り大豊（嶺北）産でまかなうことを目標にしています。子供からご年配の方まで、ヘルシーでおいしいガレットをこれからもよろしくお願い致します。（野田）

第2回パソコン教室
開催中！

昨年開催したパソコン教室が好評につき、このたび、第2回目となる「元気おおとよパソコン教室」を今年の2月

18日からの毎週火曜日と金曜日の夜19時から初級・中級合わせて計15回の講座を開催しています。

今回開設した中級クラスでは、「ワードの新しい機能を覚えたい。」「エクセルでスケジュール表を作りたい。」「インターネットやパソコンのメールを使いこなしたい。」など、受講生がパソコンで挑戦したい事に対してスタッフがアドバイスや練習用課題を用意するなどしてスキルアップのお手伝いをしています。

初級クラスではゲームなどを盛り込んで、初めての方に楽しくパソコン操作に最低限必要なマウス操作とタイピングの技術を習得していただけるよう工夫を凝らしました。

元気おおとよでは「大豊町民のITスキル向上」に向けてより受講生のニーズやレベルにあった支援ができるよう、さらにレベルアップを目指しながら今後もパソコン教室を開催していく予定です。

（猪野孔）

おおとよいんどこよう？
（その2）

今回の「大豊どこでしょう？」は昨年12月に霧石溪谷にあると言われる「ムササビの滝」というところに行ってきました。霧石溪谷は岩原からさらに奥に入って行った場所にあります。メンバーは私と霧石に詳しい元気おおとよの理事長、私の弟の3人です。

今回、「ムササビの滝」に行くことになった発端は、道の駅で働く弟が、来客者からこの滝の場所を尋ねられた際に答えられず、その場所を探しているという話題から始まりました。たまたま理事長がその場所に心当たりがあり、行ってみようということになったのです。道のりは、まず「刀岩原」から「美桜の里」への案内板のとおりに進み、そこから先へ進むと霧石溪谷があります。途中、霧石と書いた案内板とは逆の道を少し進むと「霧石橋」があり、この橋から川沿いに少し登っていくと「ムササビの滝」が現れます。



また新しい大豊町の素敵な場所を発見できたという気持ちで今回の旅を終えることができました。

裏面につづく

私は滝自体にはそんなに期待していませんでしたが、行ってみると高さは30メートル近くあると思われる巨大な滝で、上部には長年の水流によって削られた綺麗な岩の曲線も見ることができ、なかなかの迫力でした。目的地にたどり着いたという興奮もあり、写真に示すとおりメンバー全員、その日1番のテンションー！ 理事長いわく、そもそも「ムササビの滝」とは正式な名称ではなく、この滝をラフティング会社のキャンピオニングツアーで使うときに「ムササビキャンピオン」と呼んでいることから一部の人の間でそう呼ばれているのではないかということでした。もし、この記事をお読みになった方で、「ムササビの滝」の昔からの呼び名を知っている方がおられましたら担当の私までご連絡頂けると幸いです。

(猪野大助 090-3997-1404)

元気おおとよミニシアターのお知らせ

元気おおとよでは、これまで不定期でミニシアターの上映を行っていましたが、今後は毎月第3土曜日の午後1時～に上映日を固定致します。

また、この元気おおとよ新聞で今後の上映スケジュールを告知いたしますので、ご確認頂いて、ご覧になりたい映画があれば是非お越しください。ただし、町内の他のイベントと重なった場合は上映を延期する場合がありますのでご了承ください。

- 4月12日(土) 「ALWAYS (オ・ル・ヰ・ズ) 三丁目の夕日」
5月17日(土) 「映画ドラえもん のび太の恐竜2006」
6月21日(土) 「TAXI (タクシー) 2」



コラム

冬のヒマワリ (その2)

不思議に思うことのひとつに、ここ数年何度かあった選挙の公約や演説に「温暖化問題」がほとんど取り上げられなかったことがあります。美しい国を謳う首相の所信表明や議員の質問などでもまず耳にしたことがありません。そう遠くない過去のいつとき、あれほど騒がれたのになぜと思うのは私だけではないと思います。思うに、議論の対象軸になり得ないからかもしれません。憲法やTPP、原発問題などについてはそれぞれの立場で自己の考えを主張したり相手を批判することが可能です。それだけに一般受けもしメデイアやマスコミもこぞって取り上げます。比べて温暖化はまずほとんどがノーの立場でしょう。(もつとも、「温暖化は嘘だ」というような書籍が本屋の店頭に並んだりするようなこともあるようですが)議論や協議の場で賛成だ、いや反対だとやり合う場面は想像できません。関心がないとは思いませんし我々にも責任があると思います。が、それにしても？はつのります。

前号で愛媛県のカンに大量発生したカメムシを話題にしましたが、おそらく温暖化によるものでしょう。夏の30度を当たり前のようを超える異常とも言える暑さがその最たる現象で、似たような話はいろんなところで聞きます。長年野菜作りにいそしんできた近所のおばちゃんからは、野菜の育ち方や虫の話が疑問符付きで伝わってきます。畑仕事の手を止めて、「妙な時代に

なったねえ。」と心配顔で話す人もいます。長い間、汗水流し丹精込めて携わってきただけに説得力があります。まさに理屈でなく知人こそ知る実感でしょう。

まっこと「このままでいいのだろうか」と、2億5000年前のペルム紀に起きた現象(地球上の95パーセント以上の生物が絶滅)に思いを馳せたりします。時折新聞やテレビで思い出したように取り上げられますが、そんな中、昨年東豊永の生涯学習センターで開かれた「農村の国際研究会」。アジアの海外研究生がアジアの農村の現状を報告しました。か」と、2億5000年前のペルム紀に起きた現象(地球上の95パーセント以上の生物が絶滅)に思いを馳せたりします。時折新聞やテレビで思い出したように取り上げられますが、そんな中、昨年東豊永の生涯学習センターで開かれた「農村の国際研究会」。アジアの海外研究生がアジアの農村の現状を報告しました。

後日、高知新聞の「土佐のあちこち」の記事で紹介され、「アジア各国で過疎が進んでいる。都市移住が進み、高地の村は放棄地が増え、食糧不足に陥っているネパール。バングラデシュでは、若者が農村に強い思いを残しながら、先進国の工場進出などで栄える都市へ移る。経済活動のグローバル化に押し流されるように、世界的に農村離れが起きている。」とまとめていました。驚きつつもやはりと思いながら私も地球の温暖化と結び付けてひと言述べさせていただきました。記事の最後を、

「長く問題視されながら、国の対応に切迫感が足りない空気は温暖化の議論とも似る。研究会では、雨が減り、農業ができない地域が出ているとのミャンマーの報告もあった。地方の衰退もグローバル化している。」と結んでいました。

「国の対応に切迫感が足りない」とありますが、まてまて国ばかりではないぞ？と思います。自身、不安には思いながらエネルギーの消費が当然のような生活です。切迫感を越して遅きに失したのかもしれない。年明けの1月末の新聞やテレビで、今世紀末(あと86年)までに国内の砂浜の90%が消失、世界の平均気温4.8℃上昇、平均海面8.2cm上昇というニュースが流れました。砂浜については、対策を講じたとしても50%が消失し、防災に大きく影響するというニュースが流れました。驚きの内容ながら、ソチ五輪や東京都知事選、国会の論戦に隠れたやにも感じられました。また、最近発売された月刊誌「文芸春秋」の2月号の特集は「『20年後の日本』への50の質問」でした。その50の質問の中に「異常気象はいつまで続く」というものがあり、専門家が警鐘を鳴らしながら答えていました。(次回にその概要を掲載する予定です)。

冬のヒマワリはしおれて首を垂れてしまいましたが、「明日を考えることができるのは人間だけ」という言葉があります。明日のためにみんなで首を持ち上げるときかもしれません。(次号へ続く。鄙)